

空手道詳説（37）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（1）沖縄の言語

キ 首里方言の発生とその後

1406年、尚巴志（1372～1439年）は中山王の武寧（1356～1405、在位：1396～1405年）を滅ぼし、父の思紹（1354～1421年、在位：1406～1421年。尚思紹王を名乗る。）を奉じて中山王とした。

尚思紹王の崩御後、第2代王となった尚巴志（在位：1422～39年）は、1429年に対抗勢力（山北、山南）を滅ぼして統一（三山統一という）し、初めて琉球統一の王国を成立させた。これを第一尚氏王統という。その後、1469年に尚円が王となって築いた第二尚氏王統との区別からの呼び名である。

尚巴志は、三山統一後に首里城を王家の居城として整備拡張し、浦添城から移り首里を王都とした。

王府には、沖縄本島以外に諸島各地から集まる臣下の按司や士族たちがいて、それぞれの地における言語（方言）を話すため、指令の伝達や意見調整、意思疎通を図るに大きな障害となっていた。

一口に琉球方言といっても、基は一つの言語から発生していながら、長い年月を経て各地で方言化し、沖縄本島や近隣の島々で話される沖縄方言、沖縄島の北方には奄美諸島に及ぶ北琉球方言があり、南方に向えば宮古島を中心とする南琉球方言（先島方言ともいう。）がある。これら方言の間では、通訳を立てない限り通じ合わないほどの隔たりがあった。

致し方ない事情により、互いに通じ合える共通語の必要性に迫られ、新たに作られたのが沖縄方言の一つ、「首里方言」と呼ばれた言語であった。

首里方言は、第一尚氏王統において王府の公文書や、琉歌、漢詩を除く詩歌、口承文芸、文学などに書かれ、会話にも用いられたが、短年月で一気に完成したのものではない。必要上から、次第に形成されて普及浸透した。

7代の王によって64年間続いた第一尚氏王統は、第7代尚徳王(在位:1461-1469)の世に、家臣の金丸によるクーデターによって滅ぼされ、金丸は尚円王(1415~76年、在位:1469~76年)を名乗って第二尚氏王統を樹立した。

尚円王の崩御後、世子の尚真(1465~1527年)が第2代王に即位(在位:1477~1527年)すると、王権の強化と中央集権支配体制に向けて様々な政策を行使するが、その中で首里方言も一層整備され完成に至ったとされている。

首里方言の特徴として、琉球古語が多く採用されたことである。琉球古語の起源は、前項で述べた東京大学名誉教授・服部四郎博士の説を再び登場させれば次である。

現代京都方言と首里方言との分離時期は、1450年ないし、1700余年前と推定された。日本語と琉球語とは、ちょうど弥生式時代から古墳時代ころに分離したのではないかと、考えられる訳だ。

この言語年代学の学説を基に考察すれば、15世紀頃は、琉球で語り継がれてきた古事説話や伝承の中には、未だ古い言葉がふんだんに残されていたと推察される。それらの古語が、首里方言の中で再び日の目を見たといえるだろう。それ即ち、首里方言には、大和古語の残影がふんだんに加味された言語になったと思われる。

理由として、王国統治の権威を象徴し、治世の中核をなす言語の重要性を鑑み、重みや格調を考えてのことと思う。日本(本土)の場合でも、階級や職業により多様な言葉の区別があって、記述文章も話し言葉と違っていたことを思えば、この成立過程を考えるのに容易いかと思う。

王族などの上層部や、士族階級によって使用された首里方言は、琉球古語が加味されたことにより、各地で既に失われてしまった古い発音の区別(母音の違い)があった。士族男子は、訓練によって規範的な首里方言の発音を身に付けていた。

なお、1711年に完成した「混効験集(こんこうけんしゅう)」という書物は、乾坤の二巻からなるが、第二尚氏第11代尚貞王(在位:1669~1709年)の宣旨により、三司官の一人である識名盛命(1652~1715年)の他7人が編纂に携わって著作され、尚貞王の崩御後に完成をみた。この「混効験集」は、王国初となる琉球古語辞典的な存在として、王府の宮廷語を解説している。

沖縄県立博物館所蔵の「評定所本(ひょうじょうしょぼん)」は、「混効験集」最古の筆写本とされており、もしかしたら「評定所本」は原本でないのかとの議論もあるが、結論には至っていない。写本として、琉球大学附属図書館ホームページ・伊波普猷文庫から全文が閲覧可能である。

序文には、尚貞王の先々代、先代に当たる尚賢王(在位:1641~47年)、尚質王(在位:1648~68年)、そして尚貞王の三代にわたって宮廷に仕えた老女が覚えていたオモロ(古代から伝わる歌謡)や古語の口ずさみと吟詠(口号という)を収録したと記され、他にも大和(日本)の辞典や物語類からの引例も含まれている。

一方、庶民間においては、各地の方言が抑圧されることなく、依然として地域ごとに多様な言語が使われ、かつ残された。

また、商人の間における共通語として、那覇方言が広く使用されて通用した。

時代は下がり、明治維新後の日本政府は、1872年(明治5年)に第19代尚泰王を藩主とする琉球藩を設置(第一次琉球処分)し、次いで1879年(明治12年)には沖縄県の設置(第二次琉球処分)という一方的な措置により琉球王国は解体され、日本国に併合された。

その後は、首里方言に代わり那覇方言が地域周辺の共通語となり、首里方言は王族・士族階級の消滅とともに衰退し、次第にどの階級においても使われなくなった。

琉球処分に至る経緯とその後の経過については、後に詳しく述べることにしたい。

(つづく)

参考文献等(発行年月は著書に記載のまま)

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、榊勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行

- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行